

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## Commentaries on the Zhongguo xiaoshuo shilue : Lu-xun's a brief history of Chinese fiction (XVIII)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2002-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中嶋, 長文, Nakajima, Osafumi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/902">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/902</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



# 中國小說史略考證 第十八

中 島 長 文

1 「封神傳」一百回、以至未有以鼎足視之者也

一七〇十一

寫印本「大略」二二、鉛印本「大略」一六、「史略」ともそれほど大きな異同はない。「今本」「日本藏明刻本、乃題許仲琳編（『内閣文庫圖書第二部漢書目錄』）、今未見其序、無以確定爲何時作、但」は訂正版で附加された。これは辛島堯がもたらした内閣文庫の目錄によって補ったものである。その他訂正版で變つたのは、「名宿之名未言」の「言」が、寫印本から「詳」に作り、「平妖傳」序の後に讀點が附され、「殆成于隆慶萬曆間」の上にあつた「其書」二字が刪られたことである。寫印本と鉛印本の異同は、「故迄今未有以鼎足視之者也」を寫印本では「望塵尙遙、遑論鼎足、僅止于神異小說之備員而已」に作る。また魯迅の案語は初版で附加された。なお鉛印本では以下の小説は『西遊記』と同じく第十六篇「明之神魔小説」(下)で論じられている。

「小説的歴史的變遷」第五講六、(二)「封神傳」 『封神傳』在社會上也很盛行、至爲何人所作、我們無從而知。有人說、作者是一窮人、他把這書做成賣了、給她女兒作嫁資、但這不過是沒有憑據的傳說。ここに引く傳説は同じく次に引く

梁章鉅の「歸田瑣記」七によつてゐる。

『小説舊聞鈔』『封神演義』引（『歸田瑣記』七）云、吾郷林樾亭先生言、昔有士人罄家所有、嫁其長女者、次女有怨色、士人慰之曰、「無憂貧也。」乃因「尙書」武成篇「惟爾有神尙克相予」語、演爲封神傳、以稿授女。後其婿梓行之、竟大獲利云云。按「史記」封禪書云、「八神將、太公以來作之。」『舊唐書』禮儀志一引「六韜」云、「武王伐紂、雪深丈餘。有五車二馬、行無轍迹、詣營求謁。武王怪而問焉、太公曰、「此必五方神、來受事耳。」遂以其名召入、各以其職命焉。」『太平御覽』十二引「陰謀」所載、與此略同、而以祝融、玄冥、句芒、蓐收爲四海神名、馮修爲河伯神名、使謁者各以其名召之、五神皆驚云云。則知太公封神、古有此說。今人於門戶每書「姜太公在此、百無禁忌」、亦非無所本矣。

又引梁紹壬「兩般秋雨盒隨筆」六云、「封神演義」一書、可謂誕且妄矣、然亦有所本。『舊唐書』禮儀志引「六韜」云、「武王伐紂、雪深丈餘。五車二馬、行無轍迹、詣營求謁。武王怪而問焉、太公對曰、「此必五方之神、來受事耳。」遂以其名召入、各以其職命焉。」案五車二馬、乃四海之神祝融、句芒、顓頊、蓐收、河伯、風伯、雨師也。又「史記」封禪書「八神將、太公以來作之。」則俗傳不盡誣矣。今凡人家門戶上多貼姜太公在此、諸神迴避、亦由此也。「小説舊聞鈔」はこの他にすでに本文中に引用された「浪迹續談」の記事を引く。

「關於小説目錄兩件」甲「内閣文庫圖書第二部漢書目錄」云、「封神演義」（百回、二十卷。明許仲琳編。明版。二十本）中略。迅案、此目雖非詳密、而已裨多聞。如「女仙外史」、俞樾見「在園雜誌」、始知誰作（『茶香室叢鈔』云）、此則明題呂熊。『封神演義』編者、爲明許仲琳、而中國現行衆本皆逸其名、梁章鉅述林樾亭語（見「浪迹續談」及「歸田瑣記」）、僅云「前明一名宿」而已。後略。「改訂内閣文庫漢籍分類目錄」集七戲曲小説類（昭和四六）云、「新刻鍾伯敬先生批評封神演義」二〇卷一〇〇

趙景深『中國小說史傍證』一八云、「林樾亭」即林喬蔭、清侯官人、字育萬、又字樾亭。博洽多聞、善文詞、通史事、乾隆舉人、知江津縣、有『三禮述數求義』『瓶城居士集』。

張無咎「重刻平妖傳序」參看第十四篇13。

張無咎の序が『封神演義』に言及するのは、第十四篇に引いた『映旭齋增訂北宋三遂平妖全傳』つまり得月樓藏版本に附されたものに於てである。「魯迅藏書目錄」が著録する清刻本八冊というのも、その系統に属する版本であろう。明泰昌元年に刻された『天許齋批點北宋三遂平妖傳』の張序は、『封神演義』には言及しないし、「茲刻回数倍前、蓋吾友龍子猶所補也」とも言わない。著者の籍貫も泰昌版では隴西とし、得月樓本では楚黃とするなど常識では考えられない書き方なので、得月樓本の序は或いは張譽に假托したものかもしれない。「史略」がこの作品を「殆成于隆慶萬曆間矣」としたのは、張譽の再序に「書已傳于泰昌改元之年」と言うのが一つの根據であろう。

2 『史記』封禪書云、以至則方士之見而已。

一七〇一六

寫印本『大略』、「狐精」上「九尾」二字有り、「由來」を「相傳」に作り、「然 封神 亦明代巷語云々」の一文なく、『封神傳』即始自」を「此書起于」に作り、「神佛雜出」を「雜出神佛」に作り、「闡教即道釋」を單に「道釋」に作る。そして「助殷者爲截教」の「截教」を誤つて逆の「闡教」に作る。以下「截教」とあるべき所をすべて「闡教」とする。これは直接にはこの節に引く錢靜方『小説叢考』(後掲)の誤りに引かれた失誤であろう。「截教不知所謂」の「謂」を「指」に作り、「錢靜方(『小説叢考』上)以爲」を名に出さず、「或以爲魔。因」に作る。そして魯迅の案語はまだない。續く「魔與人分別言之、作者遂由此生發爲截教。……所未詳也。」の部分がない。「而人神之死、則

委之劫數」を「而以人仙之死、歸於劫運」に作る。「其間時出」を「雖間見」に作り、「略如」を「亦如」に、最後の「也」を「而已」にそれぞれ作る。鉛印本『大略』が『史略』と異なるのは「(『小説叢考』上)」の位置が「然、魔羅、梵語」の上に来ることと、截教・闡教をまちがえて、寫印本『大略』をそのまま襲っている點である。「封神」亦明代巷語」の「封神」に括弧が附いたのは訂正版から。

『小説的歴史的變遷』第五講云、它的思想、也就是受了三教同源的模糊的影響。所敘的是受辛進香女媧宮、題詩贖神、神因命三妖惑紂助以周。上邊多說戰爭、神佛雜出、助周者爲闡教、助殷者爲截教。我以爲這「闡」是明的意志、「闡教」就是正教、「截」是斷的意思、「截教」或者佛教中所謂斷見外道。——總之是受了三教同源的影響、以三教爲神、以別教爲魔罷了。

寫印本以來引く「史記」封禪書の文が直接「史記」からの引用ではなく、「小説舊聞妙」に引く梁壬紹ないしは梁章鉅の文章からの孫引きであることは、新版全集注の指摘の通りである。「史記」の原文は、始皇が東海に遊び、名山大川及び八神を祭る所に、「八神將自古而有之、或曰太公以來作之」とあり、後に八神の名が續く。「六韜」は梁紹壬『兩般秋雨盦隨筆』に引く通り、「舊唐書」禮儀志に引くもので、これは梁章鉅の『浪迹續談』の記事とも一致する。「金匱」はたとえば次に引く故事などその例にならう。

御覽三四九引云、武王伐殷、丁侯不朝。尙父乃晝丁侯、三旬射之。丁侯病、遣使請臣。尙父乃以甲乙日拔其頭箭、丙丁日拔其目箭、戊己日拔其腹箭、庚辛日拔其股箭、發亥日拔其足箭。丁侯病乃愈。四夷聞皆懼、越常氏獻白雉。同話は御覽三七二にも引く。

錢靜方『小説叢考』封神傳考云、傳中凡釋道兩教、皆助岐周、而惟闡教則助殷、及其既也、凡入闡教中者、皆爲釋道

二教所殺、是亦有本。考周書克殷篇、武王遂攻四方、凡愍國九十有九國、馘魔億有十萬七千七百七十有九、俘人三億萬有二百三十。魔與人分別言之、作傳者遂於釋道之外、又設一闡教名目。闡教者、即由魔字中生發者也、故其中以魔家四將（魔禮青、魔禮紅、魔禮海、魔禮壽）爲最神勇。

文中「闡教」と「截教」を顛倒しているのは錢靜方の失誤である。寫印本、鉛印本『大略』で魯迅も同じあやまちを犯していることはすでに述べた。「魔」字に關する議論は、魯迅も見たはずの朱右曾『逸周書集訓校釋』では「曆」に作り、「曆本作魔、或作磨、未詳孰是」とする。最善と稱せられる盧文昭の抱經堂叢書本も「曆」に作る。そして孫詒讓の『周書斟補』は、「盧云、曆舊作魔、譌。惠云、洪邁本作磨。盧未采。案曆曆同聲段借字、謂所執俘馘之名籍也。周禮遂帥抱磨、鄭注云、曆者適歷執縛者名也。禮記月令、季冬命宰歷卿大夫至於庶民土田之數、注云、歷猶次也。郊特牲云、簡其車賦而歷其卒伍、注云、簡歷謂算具陳列之也、蓋凡校計名數之簿書、通謂之歷矣云々」と言う。これに従つても、また魯迅の説に従つても、錢靜方の「魔與人分別言之」という説は成立たなくなる。しかし事柄の事實はたとえそうであっても、『封神演義』の作者が錢靜方と同じ讀み方をしたなら、『逸周書』もその材料の一ということにはなるう。

『師弟答問集』四八頁云、（増田問曰）、二一〇 然「魔羅」梵語、周代未翻、世俘篇之魔字又或作磨、當是誤字、……右傍點ノトコロノ譯文ノ參考ニ、注トシテ「譯經論曰、魔古從石作磨、……梁武帝改從鬼。」（正字通）「正字通」ハ附會ノ説多クアマリアテニナラナイ書ト云ハレルガ參考ノタメ附記ス、以上ヲ附シテ置カウト存ジマスガ、蛇足ト思惟サレマスカ？『譯經論』トイフ本ハ坊間ニアリマスカ？（魯迅答曰）、周朝ニハ「磨」デ *mara* ノ譯語トスルコト未ナカッタ。

趙景深『中國小說史略傍證』一八云、錢靜方『小説叢考』關於『封神演義』的六頁文字幾乎全用俞樾『小浮梅閑話』、只是字句間略作改動。俞樾誤『世浮篇』爲「克殷篇」、錢靜方也就同樣搞錯了。

妲己狐精說 李瀚『蒙求』注に見えぬことは全集注の言及するところ、魯迅の思い違いで、これは『千字文』李暹注にあることを今村与志雄『中國小說史略』訳注（一九九七年筑摩書房、下卷三九六頁）は指摘する。いわゆる『千字文』注は、錢靜方が『小説叢考』で『古今事物考』を引いて「商妲己、狐精也。或云雉精、猶未變足、以帛裹之、宮中效焉。是後世纏足之作俑者、乃妲己也」と言うものより、はるかに詳しい。

『千字文』李暹注云、弔民代罪 周發殷湯 前略。武王用太公之言、遂興兵行至孟津。八百諸侯不期自來相會。一入朝歌、捉得紂殺之、捉得妲己付與召公令殺。召公見其姿容端正、一笑百美、不忍殺之、留經一宿。太公謂召公曰、紂之亡國喪家、皆由此女、不殺之、更待何時。乃以碓剉之、即變作九尾狐狸也。下略。和刻纂圖附音增廣古注千字文上卷  
しかしながら、この記事はわが國に傳存する李暹注の古抄本いわゆる上野本や、敦煌出土の殘簡諸本には見えず、刊本「纂圖本」に見えるもので、李暹の原注ではなく後人の増補であろうと思われる。ただ魯迅が「纂圖本」系の『千字文』を読んだことがあるなら、『蒙求』も『千字文』も共に童蒙幼學の書であるから、混同の可能性はおおいにある。

3 在諸戰事中、以至（第八十四回）

一七三十二

寫印本二二、鉛印本『大略』一六共に例文を引かない。『史略』各版間の異同は次の通り。「通天教主見萬仙陣受此屠戮」の「見」上に初版から三八年版全集まですべて「只」字があるが、五七年版全集で削られ、新版も同様、これは初版の舊に戻すべきである。「十二代弟子」の後に初版では讀點をつけるが、合訂二版以後削る。「只見頂上」の「頂」

字を、訂正版で「項」に誤り、五七年版全集で「項」に正された。「上有一物飛出」の「出」字、初版以後三八年版全集まですべて「去」に作るが、五八年版で「出」に改たむ、これも舊に戻すべきである。「有縁往極樂」の「往」字、三八年版全集のみ「住」に作る。『封神演義』の刊本は相當の數にのほり、魯迅が據った書がどれであるかは特定できない。『孫目』でも四系統七種が著録され、『大塚目』に至っては、項目を建てられたものだけでも二十八種の多きに渉る。そうした中で僅かに七種の版本と對校できたに過ぎないが、比較的近いと考えられるのが、光緒庚寅刊の珍菘書局鉛印本である。一、「通天教主只見萬仙陣……」と「只」字があること、これは『史略』初版から三八年版全集までの引用と一致する。他本にはこの字を闕く。二、「用五火扇扇起烈火千丈」下「扇」字を他本は「搨」に作るが、珍菘本、集成圖書公司本は「扇」に作ること。三、「只見頂上現出玲瓏寶塔」の「玲瓏」を珍菘本、集成圖書公司本はそう作るのに對して、他本は「靈籠」に作ること、などは『史略』所引と同じである。しかし「俱遭殺戮」の「俱」を「但」に誤ったり、「有縁往極樂之鄉者」の「往」字を「住」に作るなど異なる部分もある。（これは内閣文庫本（古本小説集成所収）や四雪草堂本とともに「在」に作る。）したがって『史略』が引いたのはこの書ではないであろうが、珍菘書局本と同系統の本であつたらう。ちなみにこの書は國立國會圖書館の藏本で、他本では各回の後にある總批や又批をすべて省いた小型鉛印の粗本である。ここに對校に用いた他本とは、内閣文庫藏許仲琳編輯本（古本小説集成所収）、四雪草堂本（康熙乙亥楮人穫序刊、國立國會圖書館藏本）、埽葉山房本（光緒九年刊、京大人文研藏本）、集成圖書公司本（光緒三十四年刊、京大文學部藏本）、香港中華書局排印本（一九七〇）である。なお、諸本との對校の結果は次の通りである。「子牙祭起打神鞭」の「起」字、諸本になく、上文に據つて誤つた衍字ではないかと思われる。「上有一物飛出」「史略」は初版から三八年版全集まで「去」に作るが、諸本みな「出」に作り、筆誤の可能性がある。「二十四頭」の「二」字、四



雪草堂本、掃葉山房本や中華書局本は「三」に作る。「止邱引見勢不好了」古本小説集成本の「止」下に「有」字があり、「了」字がない。

「師弟答問集」五〇頁云、「増田問曰」、二二一 截教之通天教主設萬仙陣、闡教群仙合破之ノ引用文中「這聖母披髮大戰、……遇着燃燈老人、……正中頂門。可憐！正是……封神正位、為星首（who?）、北闕香煙萬載存。」封神正位ノ時星首（星官ノ首）？ト為ルモノハ燃燈道人カ？○、這聖母カ？北闕ハ即チ燃燈道人ノ宮殿カ？○、聖母……？（魯迅答曰）、封神傳ノ中ノ詩ハ、大概馬鹿ラシイモノデス。聖母ハ殺サレマシタ。殺サレタガ封神榜ノ上ニ名ガ出テ神トナル。ダカラ封神スルキニハ正位ノ部門ニ序シテ正位ノ星官ノ第一番ニナリテ神廟（北闕、聖母モ中ニ祀ラレル）ノ香煙ハ万古ニ留ル。

4 「三寶太監西洋記通俗演義」以至則亦所長矣

一七一

寫印本「大略」二二、鉛印本「大略」一六にそれぞれこの部分に該當する記述があり、殊に鉛印本は「史略」と異同がない。「……通俗演義」亦「一百回」の「亦」字、寫印本になく、鉛印本で補う。「明史」（三四四「宦官傳」）は、寫印本「明史宦官傳」に作り、鉛印本で現行の如くなる。「蓋鄭和之在明代」の「鄭和之」三字を寫印本は「和一」字に作る。「又爲故事所囿、遂不思將帥而思黃門、集俚俗傳聞以成此作」、寫印本で「乃憶國初盛事、而有此作」に作り、鉛印本で現行の如くなる。「惟書則侈談怪異、專尚荒唐、頗與序言之慷慨不相應」は、寫印本では文字が少し異っていてこの節の最後に置かれていて、ここは「惟序雖如是、書則荒誕離奇、全由臆造。」に作る。「其第一」の「其」は寫印本になく、「爲碧峰長老下生」の「爲」を「記」に作る、次句の「爲碧峰與張天帥……」の「爲」も同じく「記」に作る。「所述戰事……則亦其所長矣」は「所述戰事、頗竊封神、而敘記更爲支蔓、蓋意在侈陳怪異、專尚

荒唐、遂不能與序言之慷慨不相應矣。」に作る。文中「頗」字を現行の「雜」字に換えたのは第三版からである。なお引用の『明史』は各所に節略があつて、「……」以外もそのまま引いたものではない。この部分はおそらく後に引く俞樾『春在堂隨筆』からの孫引きだと思われる。「以次遍歷諸番國」の「番」字が脱しているのは、寫印本からすでにそうで、現行も訂正されていない。「耗費不貲」の「貲」は寫印本から十二版まで「資」に作り、三八年版全集で訂正された。「費」は中華書局標點本では「廢」に作る。

「小説的歴史的變遷」第五講云、(三)、『三寶太監西洋記』、『三寶太監西洋記』、是明萬歷間の書、現在少見。這書所敘的是永樂中太監鄭和服外夷三十九國、使之朝貢的事情。書中說鄭和到西洋去、是碧峰長老助他的、用法術降服外夷、收了全功。在這書中、雖然所說的是國與國之戰、但中國近于神、而外夷却居于魔的地位、所以仍然是神魔小說之流。不過此書之作、則也與當時的環境有關係、因爲鄭和之在明代、名聲赫然、爲世人所樂道。而嘉靖以後、東南方面、倭寇猖獗、民間傷今之弱、于是便感昔之盛、做了這一部書。但不思將帥、而思太監、不恃兵力、而恃法術者、乃是一則爲傳統思想所囿。一則明朝的太監的確常做監軍、權力非常之大。這種用法術打外國的思想、流傳下來一直到清朝、信以爲眞、就有義和團實驗了一次。

「敘西洋記通俗演義」云、恭惟我皇明、重新宇宙、海外諸番、獲睹天日、莫不梯山航海而重譯來朝。文皇帝嘉其忠誠、敕命太監鄭公和、大司馬王公景弘泛靈槎、奉使南印度錫蘭山國、溯流窮源、直抵西印度忽魯謨斯及阿丹天方諸國。極天之西、窮海之湄、此外則非人世矣。歷國大小三十餘、番王酋長、匍匐羅拜之、爲兢兢罔敢後。中間鋤強扶弱、海道一清。歸獻大廷珠玉錦罽、珍果異香、并獅象駝鼠、猛獁火鷄之屬、礪礪然充後宮實外囿。貢琛之盛、前此未聞。書云猗夏、詩曰讐邦、夷且爲中國之梗、矧匍匐羅拜之罔敢後。周先王甚盛德、肅慎氏止間一入貢、周且頒其賂物、誥語後

人。矧舉海外大小三十餘國、盡匍匐羅拜之罔敢後。自非聖德際天蟠地、昭揭日月、而胡極天所覆、極地所載、極日月所入。文命誕敷、帖爾效順、致令二百年餘、借箸請纓之士、卷舌不談、擁旄授鉞之臣、韜戈不試、于都休哉。即碎南山之竹、捐西山之兔、曷足爲聖明揄揚萬一。稗官野史謂何、此西洋記所由作、布帛菽粟謂何、此西洋記所由通俗演義。贅彪云乎哉。耳食云乎哉。說者又謂、王者不治荒夷、九重一怒、勢必溝血枕尸、皆旅獒明教、不幾汚殺青。余曰、是不然。開闢之主、貴在宣威、守成之君、戒于好大、二者殊科。今日東事倥傯、何如西戎卽序、不得此西戎卽序、何可令王鄭二公見。當事者尙興撫髀之思乎。說者唯唯。是爲序。萬歷丁酉歲菊秋之吉 二南里人羅懋登敘。一九八五年上海古籍出版社本。

著者羅懋登については、趙景深『中國小説史略傍證』が次のように述べる。「羅懋登、字登之、號二南里人、明萬曆間人、里居不詳、似原籍陝西、實乃明應天府人。曾注釋邱濬『投筆記』、爲施惠『拜月亭』和高明『琵琶記』作過音釋、還替『香山記』傳奇作序。」著者について今わかっているのはほとんどこの域を出ない。

『小説舊聞鈔』『三保太監西洋記』引（『春在堂隨筆』七）云、「明史」宦官傳、鄭和、雲南人、世所謂三保太監者也。永樂三年、命和及其儕王景宏等通使西洋、將士卒二萬七千八百餘人、多齎金帛。造大舶、修四十四丈、廣十八丈者六十二、自蘇州劉家河泛海至福建、復自福建五虎門揚帆。首達占城、以次徧歷諸番國、宣天子詔、因給賜其君長、不服、則以武懾之。先後七奉使、所歷凡三十餘國、所取無名寶物不可勝計、而中國耗費亦不貲。自和後、凡將命海表者、莫不盛稱和以誇外番、故俗傳三保太監下西洋、爲明初盛事云。是鄭和之事、在明代固赫然在人耳目間。光緒辛巳歲、老友吳平齋假余『西洋記』一書、即敷衍此事。作者爲羅懋登、乃萬曆間人。其書視太公封神、玄奘取經尤爲荒誕、而筆意恣肆則似過之。乃彼皆盛行而此顧不甚著、何也。文章之傳不傳、若有數存、雖平話亦然歟。平齋曰、此必明季人所爲、

以媚權奄者。余謂不然。讀其序云、今者東事倥傯、何如西戎即敘、當事者尙興撫髀之思乎。然則此書之作、蓋以嘉靖以後、倭患方殷、故作此書、寓思古傷今之意、紆憂時感事之忱、三復其文、可爲長太息矣。書中卻有一二異聞。如術家有金木水火土五行遁法、見於諸書者、字皆作遁、此獨作罔、未詳其義。又如世俗所傳八仙、此書則無張果、何仙姑、而別有風僧壽、元壺子、不知何許人、豈明代有此異說歟。『圖書見聞錄』孟蜀張素卿書八仙眞形、有曰長壽仙者、或即此風僧壽乎？書雖淺陋、而歷年數百、便有可備考證者、未可草草讀過也。

世間有『牙牌數』一書、言近而指遠、占之亦時有巧合者。余聞許子社言、杭人有爲之箋註者、惟其中有五鬼鬧判一語、不知所出、以問余、亦無以應也。今乃知出於『西洋記』、第九十回云靈曜府五鬼鬧判、即其事也。開卷有益、信夫。

『小説舊聞鈔』にはこの他、『七修類稿』十二、『浪跡叢談』六、『茶香室叢鈔』十四、同『續鈔』十七の記事を引く。『師弟答問集』五〇頁云、『増田問曰』、214 『西洋記演義』ノ自序云「今者東事倥傯、何如西戎即序、不得比西戎即序、何可令□□二公見」即序云云ハ王鄭ノ二公ハ西戎ヲ即時ニ秩序シタ（即チ平服シタ）ソレニ反シテ今ハ倭寇ヲナカナカ即序（即時平服）シナイ……トイフ意ヲ有スルカ？〔魯迅答曰〕、マア、少シ有ル。今ハ東事デ忙シク、西戎ノ即序（タダチニ秩序ツク）ニ平服。ソレハ西洋記ニ書イテルコトヲサス。ニクラベレバドウダ？若シ比ベルコトガ出来ナケレバ實ニ王鄭二公ニ見セテハイケナイコトダ（□□ニ對シテハツカシイコトダ）〔増田問曰、東事〕——即チ倭寇ノコト？

〔魯迅答曰〕、yes

〔増田問曰〕、『春在堂隨筆』（『舊聞抄』）ニハ之ガ「即叙」トナツテ居マス、コノ叙ハ叙述ノ意デハナイカ？（西戎ノコトヲ早ク叙述シヨウ、早ク叙述シナケレバ公ニ濟マナイワケダ）〔魯迅答曰〕、叙ニ序ニ秩序ニツクコト

趙景深『中國小說史略傍證』一八云、「雜竊『西遊記』、『封神傳』、如『西遊記』裏有金角大王、銀角大王、『西洋記』裏就有金角大仙、銀角大仙。『西遊記』裏有吸魂瓶、『西洋記』二十八回也有吸魂瓶。『西遊記』裏猪八戒一遇危難就要散伙回高老莊看老婆、『西洋記』裏馬公公也是一來就要回南京去。

趙景深が一九三五年に書いた「三寶太監西洋記」（『中國小說叢考』所収、一九八〇年齊魯書社）には「封神傳」と共通する事として「他如哪吒、韋馱等亦均見于『西游』『封神』（二八九頁）、第二十六回曾提到『封神傳』中的雷震子（二九〇頁）を指摘している。なおこの文は、それより先一九二九年に向達が「論羅懋登著三寶太監西洋記通俗演義」（『小説月報』一九二九年一月）で『西洋記』の素材として論及した「瀛涯勝覽」に加えて「星槎勝覽」をあげて、『西洋記』との關係を詳細に考證したものであるが、其の第三章は専ら「史略」があげた「西遊記」との關係を検討している。向・趙兩氏の文はいずれも上海古籍出版社本に附録されている。

『西洋記』の版本 原刊本と考えられている萬曆刊の刊本（内閣文庫等藏）をはじめ、清代の覆明本である歩月樓本、咸豐九年廈門文德堂覆明本（これは『三寶開港西洋記』と稱する）、光緒四年上海申報館排印本などがあり、ことに最後のものは「孫目」で「不精」と評されるが、當時はこの書が最も流通したようである。「魯迅日記」の一九二六年八月十九日に、上海に魯迅を訪ねた辛島堯に「上午辛島君來る、其の午餐に留めて、贈るに排印本『西洋記』、『醒世姻緣』各一部を以てす」とある。排印本は申報館本だけでなく商務印書館本（『民國時期總書目』は一九二五年とする）もあるのでいづれかは定めがたい。時期から言えば商務版であった可能性が高い。但し『史略』成稿には間に合ないから別の版本に據ったのは確かである。『魯迅藏書目錄』に著録はない。近刊には申報館本を底本に歩月樓本で校訂した一九八五年上海古籍出版社本があり、附録には俞樾、向達、趙景深の文章を収めている。

寫印本『大略』は例文を引かない。鉛印本『大略』で現行の如くなる。

引用文の校勘に用いたのは、内閣文庫の藏する三本、つまり明萬曆二十五年序刊本（また古本小説集成本）、同じく明刊の附二本、および歩月樓本（釋本）、それに申報館排印本、および上海古籍出版社本である。「却不是錯爲國家出力了」の「出力了」は校勘に用いたすべての版本が「出了力」に作る。「判官大王差矣」の「王」字もみな「人」字に作る。最初の「也是你們自取的」の「們」字、他のテキストになく、また鉛印本『大略』になく、『史略』初版で補われたから衍字であろう。「五鬼說道、但只「不該」兩個字」の「五」下に各テキスト「個」字が有るが、鉛印本からすべて脱す。「嚷做一駄」下の「駄」字、明刊本は「馱」に作る。歩月樓本は「馱」に作り、申報館本は「馱」に作る。鉛印本『大略』は「馱」に作るように見える。上海古籍出版社本は「小的是金蓮寶象國」と「寶」字が増え、一方最初の「都是你們自取的」の「是」字を闕く。「是」字を闕くのは申報館本も同じ。また申報館、上海古籍兩本は終末の「牙齒縫裏都是私（絲）」の掛け言葉であることを示す注の「絲」が同じ大きさになって「私絲」と本文に混入してしまっている。ただこれだけでは魯迅の據ったテキストを特定することはできない。なお、鉛印本より『史略』十二版に至るまで「殺人的償命、欠債的還錢」は途中で句讀を切らない。三十八年版全集で讀點が加えられた。

「五鼠鬧東京」については、『史略』第二十八篇『三俠五義』の項で、話の先蹤は明人の『龍圖公案』（即ち『包公案』）や『西洋記』に見えるが『三俠五義』の義士ではなく、物怪であることを述べている。『龍圖公案』第五十八回がそれにあたり、「決戮五鼠鬧東京」と題する。その文末に「此段公案名『五鼠鬧東京』、又名『斷出假仁宗』、世有二說不同。此得之京本所刊、未知孰是。」とあり、當時すでに刊本があったことが分る。その簡本と見なされるものが大

英博物館にあり、『五鼠鬧東京包公收妖傳』と題する。近く古本小説輯刊第十五輯に景印収録され、一九九三年巴蜀書社の「明代小説輯刊」第二輯に排印で収録された。しかしその書が直ちに明刊であるかどうかはにわかには決めがたい。大英博物館の所蔵は一八六八年七月二十三日だという（古本小説叢刊十五輯前書）。『西洋記』では第九十五回で「五鼠精光前迎接 五個字度化五精」と題する。五鼠の事はあるいは『史略』の言うごとく、元は『西遊記』の二心の争いから出たものであるかもしれないが、やはり當時傳承されていた故事、ないしは『龍圖公案』と同じくすでに刊本になっていたものから採った可能性が高いと考えられる。

【師弟答問集】 五二頁云、216 五鬼鬧判ノ引用文中、終ノ方 判官……只得站起来喝聲道「哇……我有私……」タトヒ我ニ私アルトモ？〔魯迅答曰〕、yes 我ノ筆ハ私ナイ〔増田問曰、哇〕——黙レ！デスカ 〔魯迅〕yes 〔増田〕口ヲ走ラセレバ喋レ！ノ意ニナルト愚考シマスガ 〔魯迅〕no 「走」ハ只タ發音デス。

〔増田問曰〕、「鐵筆無私。你這蜘蛛鬚兒札的筆、牙齒縫裏都是私（絲）、敢說得個不容私？」〔蜘蛛鬚兒〕コレハ判官ノ面ニ現在生ヘテ居ル鬚ヲ指スモノカ？〔扎〕——扎ハ技カ？ 〔魯迅〕no 〔増田〕or 紮カ？ 〔魯迅〕yes 〔増田〕牙齒縫裏〔判官ノ口内ヲ言フカ？牙齒ハ筆ノコトヲ言ツタモノトハ解サレヌカ？ 〔魯迅答曰〕、鐵筆ナラ、無私ダガ汝ノクモノ絲（私ト同音）デ拵ヘタ筆ハ齒ノ間マデ皆ナ絲（私）デアル。敢テ無私ダト言ヘルカ。

私ト絲トハ同音ダカラ、言葉ノ遊戲デアル。先ヅ其ノ筆ヲクモノ絲デ拵ヘタモノト假定シ、クモハ口ノ中ニ皆ナ絲（私）デアルカラ判官ノ口ノ中カラ出ルモノヲモ皆ナ私（絲）ダトシテ仕舞フ

6 『西游補』十六回、以至殊非同時作手所敢望也

寫印本『大略』一三云、繼西游記而作者有西游補、烏程董說撰。說字若雨、黃道周之弟子也。明亡爲僧、號月涵。此

書記孫悟空夢遊事、作于明亡之後、故有青青世界及未來世界、歷日先晦後朔諸語、借稗史以抒隱痛者也。今即（印）本改名新西游記。

右の文はその文面からも明らかのように、『西游記』の敘述にすぐ續いて記されたものである。ところが鉛印本『大略』一六の『西遊記』の後には見えず、續く『封神演義』『西洋記』の後にもない。『史略』でそれが『西洋記』の後に補われた。寫印本の記述は、天目山樵の序の附いた版本に附載された「讀西遊補雜記」と蔣瑞藻『小説考證』に引く「闕名筆記」に據つていよう。『小説考證』には後に引く一條の他にもう一條「闕名筆記」から引用されているが、それは「讀西游記雜記」の二條をまとめたものである。

「（本書卷首「問答」）」後の句點は、初版、二版にはなく三版で加えられ、三八年版全集でまた落ち、五七年版全集で再び加えられた。

「讀西游記雜記」云、按鈕玉樵觚臚續編云、吳興董說字若雨、華閩懿孫、才情恬適、淑配稱閨閣之賢、佳兒獲芝蘭之秀。中年以後、一旦捐棄、獨皈淨域、自號月涵、所至之地、緇素宗仰。於是海內無不推月涵爲禪門尊宿矣。月涵於傳鉢開堂飛錫住山之輩、視若蔑如。而身心身融悟、得之典籍。每一出遊、則有書五十擔隨之、雖僻谷之深、洪濤之險、不暫離也。余幼時曾見其西遊補一書、俱言孫悟空夢遊事、鑿天驅山、出入老莊、而未來世界、歷日先晦後朔尤奇。據此知西遊補乃董若雨所作。按若雨豐草庵雜著凡十種、曰昭陽夢史、非煙香法、柳谷編、河圖掛版、文字障、分野發、詩律表、漢饒歌發、樂緯、埽葉錄。其見於四庫全書總目者、有七國考一四卷。見於存目者、有易發八卷、運氣定論一卷、天宮翼無卷數、及漢饒歌發一卷而已。朱竹垞明詩綜云、董說字若雨、烏程人、晚爲僧、名南潛、字寶雲、有豐草庵等十八集。易發提要云、董說字若雨、湖州人、黃道周之弟子也。後爲沙門、名南潛。其論易專主數學、兼取焦京陳



邵之法、參互爲一、而推闡以己意、其根柢則黃氏三易洞機也。然則若雨爲僧後、改名南潛、字寶雲、而月涵乃其別號。所著諸書、惟七國考刊於雪枝從父守山閣叢書爲最著。其餘皆就湮沒、故西遊補一書、宜亟刊以傳世也。說庫本。四庫總目提要八、その前半を引く。

「闕名筆記」云、近時刊行之新西遊記、即董說之西遊補也。說爲吳興南潯人、字若雨、明之遺民也。中年而後、獨皈淨域、有豐草庵雜著十種。先生當鼎革後、目擊世變、腥羶徧地、書中所云青青世界、及殺青大將軍等、頗寓微意。其尤顯者、鯖魚指平西而言。蘇湖方言、吳魚二字、並讀若痕。又倒挂天山、鑿開天口等詞、亦影射吳字。且逆數歷日、孤臣心事、於無可奈何之日、猶冀天地之旋轉。全書以牡丹始、以桃花終、花王世界、不宜異種屢入。輕薄之桃花、雖能乘時獻媚、亦終於逐逝水之流耳。此作者立言之本旨也。蔣瑞藻「小說考證」上海古籍出版社本。寫印本の、「西遊補」の著作が明滅亡後とし、「新西遊記」が「西遊補」の近刊だとするのは、この記事に據ってしよう。ただ崇禎刊本がある以上、著作の時期は明が亡んで以後ではありえない。魯迅が「史略」定稿までに崇禎刊本の存在を知っていたかどうかは不明。筆法から見れば知らなかったように見える。「闕名筆記」の作者は「腥羶徧地」などという言葉から見れば、明らかに反清の革命家であり、清末の志士であったにちがいない。魯迅は一旦は同調したそうした見方を、作品を読み直すことによって改めたと思われる。「新西遊記」の方も現物が確認できなかったのであろう。同名の書が少なくとも二つあることが分っている。一は冷血著五回、宣統元年小説林鉛印本であり、もう一つは煮夢著六卷三十回宣統元年改良小説社鉛印本であって、共に「西遊補」の新版ではない（「中國通俗小説總目提要」一九九〇・中國文聯出版公司）。

天目山樵「西遊補」序云、予游鶯湖、得見此本于延州來氏。原本略有評語、以示我友武陵山人。山人曰、未盡也。問疏證一二、以示道人、道人曰、嘻、猶未盡。乃復加評閱考論、而刪存其原評之中竅者、猶以爲未盡、不得如悟一子之詮西遊記也。

予曰、書不盡言、言不盡意。讀者隨所見之淺深、以窺測古人而已、奚所謂盡者。西遊借釋言丹、悟一子因而發仙佛同宗之旨、故其言長。南潛本儒者、遭國變、棄家事佛。是書雖借徑西游、實自述平生閱歷了悟之迹、不與原書同趣、何必爲悟一子之詮解。且讀書之要、知人論世而已。今南潛之人與世、予既考而得之矣。則參之是書、情情越向、可以默契、得失離同之間、蓋幾希矣。若夫不盡之言、不盡之意、邈然于筆墨之外者、此則其別有寄托而不得已。于作書之故、豈可以穿鑿附會而自謂盡之。

道人曰、書意主於點破情魔、然西遊全書、可入情癩者不少。何獨托始于三調芭蕉之後。曰、南潛易發、因見杏葉而悟黃鍾之度。西遊言芭蕉扇、小如杏葉、展之長丈二尺、或有所觸、遂托始于此。道人笑曰、其然、此亦不可盡之一證也。他日將授之梓、而請序于予、因書其語以貽之。 癸丑孟冬天目山樵識。 據清光緒元年申報館排印本、今據丁錫根編「中國歷代小說序跋集」引。

天目山樵とは張文虎（嘉慶一三・一八〇八—光緒一一・一八八五）、字孟彪の別號である。南滙の人、若くして錢熙祚の『守山閣叢書』の校訂などをし、又同じ別號で『儒林外史』の評をしている。したがって序の「癸丑」は咸豐三年一八五三年に當る。いわゆる空青室刊大字本の刊行はそれ以降ということになる。

『小説舊聞鈔』『西遊補』引（『觚臈續編』二）云、吳興董說字若雨、華閩懿孫、才情恬曠、淑配稱閨閣之賢、佳兒獲芝蘭之秀、中年以後、一旦捐棄、獨皈淨域、自號月涵、所至之地、緇素宗仰、於是海內無不推月涵爲禪門尊宿矣。月涵於傳鉢開堂飛錫住山之輩、視若蔑如、而身心融悟、得之典籍。每一出遊、則有書五十擔隨之、雖僻谷之深、洪濤之險、不暫離也。余幼時曾見其『西遊補』一書、俱言孫悟空夢遊事、鑿天驅山、出入莊老、而未來世界歷日先晦後朔尤奇。

（乾隆『烏程縣志』六引「蓬窩雜稿」）董說字若雨、斯張子。少補弟子員、長工古文詞、江左名士爭相傾倒。未

幾、罹闖禍、屏跡豐草庵、宗親莫覩其面、以蹇自名、改氏曰林、精研五經、尤邃於「易」。丙申秋、削髮靈岩、時往來潯川、甲子母亡、遂不復至、寓吳之夕香菴、一當時屏輿從訪之、聞聲避匿、當事歎息而去。

〔明詩綜〕八十一上）董說字若雨、烏程人。晚爲僧、號南潛、字寶雲、有豐草菴等十八集。若雨腹笥便便、未免有才多之恨、至其硬語澀體、絕不猶人、方諸浩翁不足、比於饒德操有餘。「南邨秋鬼謠」云、「妖狐拜月霜花青、鬪體騎馬空中行。秋魂吹作塔鈴語、叫斷東流一溪水。鬼車曉喚精靈去、綠燈移過江楓樹。」「春日」云、「煮茶烟透綠陰中、遮屋黃茅間瓦松、但遣異書供研北、不妨野語聽齊東、香拈細雨招新夢、門閉春風仗短童、秋色今年應更好、小牕移得碧梧桐。」「夢華潭口聽客話嘉隆間大內舊事」云、「月華門外轉靈旂、照夜銀盤碧藕肥、祠罷天孫桐葉落、君王新賜鵲橋衣。」「江南風景藥王灣、霧縠單衣綠玉環、紅芍藥邊棋局罷、自裁團扇畫秋山。」

〔甲申朝事小紀〕一）董公諱說字若雨、生於萬曆庚申、甫三歲、嘗跌坐自語、父遐周先生甚愛之。五歲讀書、師教之總不開口、時董玄宰、陳眉公在座、問他、「喜讀何書。」忽開口曰、「要讀「圓覺經」。」聞者甚怪之。遐周先生依言、曰、「吾教之自得域外之方也。」讀「圓覺」畢、即讀四書五經、十歲能文、十三歲入泮、十六歲補廩、二十餘歲善觀天象。崇禎年間、聞中原流賊之亂、從此無意功名矣。先生家道豐腴、房屋巍煥、園畝膏腴。忽以爲富饒非亂世之福、值歲荒、出金珠米穀、周給飢寒之家。滄桑之變、先生剪髮不剃頭、頭巾道袍、蓋豐草菴、足不越戶、有「豐草集」千餘章、詩詞樂府十餘卷。生六子、曰樵、曰牧、曰耒、曰舫、曰漁、曰村。於三十四歲走見靈巖繼和尚、打七參不與萬物侶者是什麼人、第三日即豁然、因隨靈巖披剃、法名南潛、字月涵、堯封、寶雲。因瓦破霜飛、又別號漏霜。有「上堂晚參唱酬語錄」。事師最孝、不接見賓客、其姪董楚望高發謁師、不許相見。直俟靈巖圓寂之後、在西洞庭、紫石山、葛公泉諸處住靜、每日禮坐或吟詩、不喜見冠蓋。一日、偶在夕香避暑、其時慕撫臺祖道尊企慕欲見、再三囑華山

僧鑒和尚指引求見。鑒曰、「若遇先通知，必不肯見，今在夕香，乞二公減從，同片舟去，即可相見矣。」同至夕香叩門，僧鑒先入，祖慕二公尾行。師曰、「請少坐，吾去穿道服。」從籬門逃至湖邊，塔便船過洞庭去矣。其高致如此。師棄現在田園，滄桑後剪髮作頭陀，及出家三十餘年，惟與黃九煙先生深談。生平目不較柴米，手不拈銀錢，足不覆城市，或與樵叟漁父交談，而紈袴市井，從不相對。方外之清高，誰可與匹儔庸哉。

（「春在堂隨筆」九）董若雨說「棟花磯隨筆」，但有鈔本，沈毅臣庶常以示余，字跡皆草草，殆邨學中童子所書也。其中載朱文公「祝融峯」詩云、「我來萬里駕長風，絕壑層雲許盪胸，濁酒三杯豪氣發，朗吟飛下祝融峯。」有校者云「下當作上。」余案頭無「朱文公集」，未知孰是。然以愚見論之，作下者殊勝。蓋既御風而行，則搏扶搖而上，背負蒼天，祝祝融峯轉在下矣，故云飛下祝融峯也。若作上，則與芒鞋藜杖，攀授而上者何異。一字之分，仙凡頓別矣。當與毅臣言之，未知以爲然否。又董若雨世皆以爲明人，而「棟花磯隨筆」有一則云、「庚申二月，在鷓鴣溪艇子上見陽明先生書迹，念先師所許一凝字及補山堂一涼字，皆書苑未發之祕。舊吳釋南潛題。」然則此老爲僧後，至康熙十九年猶在，入本朝不可謂不久矣。顧亭林、王船山皆明之遺老，而卒於本朝，則皆本朝人物也。董若雨亦可援此例乎。考汪謝城「南潯志」、董若雨卒於康熙二十五年丙寅，年六十七。則明亡時纔二十五歲耳，其爲本朝人無疑。「潯志」列入明人，是論其志，非論其世。

「棟花磯隨筆」有一則云、「客有戴星叩余門云云。此客出門，徧告市人，曰高暉生直是退財白虎。」余按汪謝城「南潯志」董說傳所載，名字甚多。初名說，字若雨，號西菴，自稱鷓鴣生，又稱斯張子。聞谷大師錫名智齡。國變後改姓林，名蹇，字遠遊，號南村，亦稱林鬍子，又稱槁木林。靈巖大師名之曰元潛，字俟庵。爲僧後更名南潛，字月涵，一作月巖，號補樵，一號楓庵，又名本以。而無高暉生之名。此可補「潯志」之缺。

〔魯迅〕案、乾隆『烏程縣志』謂說爲董斯張之子、非自號也、疑曲園誤。然案頭無汪曰楨『南潯志』、無以定之。靜嘯齋主人「西遊補答問」云、問、西遊不闕、何以補也。曰、西遊之補、蓋在火焰芭蕉之後、洗心掃塔之先也。大聖計調芭蕉、清涼火焰、力遏之而已矣。四萬八千年、俱是情根團結、悟通大道、必先空破情根、必先走入情內、見得世界情根之虛、然後走出情外、認得道根之實。西遊補者情妖也。情妖者鯖魚精也。文學古籍刊行社本。「靜嘯齋」は董氏父子の室號、こゝは董說を指す。

7 『西遊補』第六回引文

一七十四

『魯迅藏書目錄』平裝部分小説類には「西遊補 清董弱雨著 劉半農校點 一九二九年 上海 北新書局 初版」とあるが、劉半農の「董弱若傳」を附載したこの書は時期的に「史略」定稿に與らない。「日記」一九二四年八月五日の條に「下午胡適之に信并びに文稿一篇、『西遊補』二本を寄す」とある。但しこの二本の「西遊補」は他に著録がなく、どんな版本であつたのか未詳である。

「史略」各版間の異同は、「昨日反拖罪名在我身上」の「拖」字が、初版から三八年版全集まですべて「抱」に作る。「走了數百萬里」の「萬」字、初版では落さないが、合訂二版から三八年版全集まで脱し、五七七年版全集で補われた。「不是逆賊」の「逆」字、五七七年版全集、七三年版全集では「迎」に作るが、新版全集で「逆」に戻された。「治妖斬魔秘訣」の「訣」字、初版は「決」に誤る。「我綠珠樓上的遙丈夫」の「的」字、初版から三八年版全集まで「強」字に作り、五七七年版全集で「的」に改められた。

明崇禎年間本、說庫本、北新書局本、上海古籍出版社本によって校對して見ると、「拖罪名在我身上」の「拖」字を「抱」字に作るのは、說庫本、北新本、上海古籍本で、崇禎本は「拖」に作る。「鷄唱三聲」は各本皆な「鷄聲三唱」

に作る。「天已將明」の「將」字は崇禎本「未」に作る。「古人世界也、有賊哩」の「也」字、崇禎本はその通りに作り、説庫本は「之」に、北新本はなく、上海古籍本は「里」に作る。「不是逆賊」の「逆」字、崇禎本は「迎」、説庫本、北新本、上海古籍本は「逆」に作る。「一頂、包巾」の「頂」字、説庫本は「項」に作る。「又是玄色面孔」の「玄」字、説庫本は清諱を避けたのか「元」に作り、北新本、上海古籍本も同じ、それなのに三本とも次に続く「大禹玄帝」の「玄」は避けない。崇禎本は共に「玄」に作る。北新本「我便上前見他」の「上前」を顛倒する。「六箇紫色字」の「六」字、崇禎本は何故か「四」に作る。「我綠珠樓上的、遙丈夫」の「的」字、説庫本は「強」に作る。以上からすると『史略』の引用文はどの版本とも合わないが、最も近いのは説庫本である。申報館排印本は未見である。

近刊には崇禎間原刊本の影印に文學古籍刊行社本（一九五六）、臺灣世界書局本（民國四七）、傅世怡『西遊補初探』附録本（民國七五・臺灣學生書局）があり、申報館本の影印に臺灣新興書局本（未見）、北新書局本（一九二九）の影印に臺灣河洛出版社本（民國六七・未見）がある。また崇禎本を底本に古典文學出版社によって校改したと稱する上海古籍出版社本（一九八三）があるが、崇禎本に必ずしも忠實であるわけではない。発行されなかった亞東圖書館版の紙型を用いた古典文學出版社本（一九五七）があり、亞東版は通行本に據っているというが、詳しいことはわからない。さらに崇禎本に據る排印本廣東人民出版社本（一九八一）がある。日本語譯に荒井健・大平桂一譯『鏡の國の孫悟空——西遊補』（二〇〇二・平凡社東洋文庫）がある。

『師弟答問集』五二頁云、（増田問曰）、219ノ最後ノ行 把始皇消息問他、倒是個着脚信。」脚デ歩いて行ッテ聞ク信、即チ直接的ナ信?（魯迅）no 最も確實な「信?」（魯迅）yes 着脚||足フミアル||確實

（増田問曰）、右ノ少シ前ノ分 …… 倒是我綠珠樓上強、遙丈夫。」綠珠樓デ虞美人（悟空）ハ項羽氏トハ離レテ、別ニ

美人同志デ宴シタルヤ？〔魯迅〕Yes 〔増田〕或ハ項羽ト共ニ宴シタルヤ？〔魯迅〕No 〔増田〕原本手元ニナク調査  
サレマセン乞教、〔魯迅答曰〕、強遙ハ解釋ニ苦ム、「名義上ハ」或ハ「有名無實」ノ意ナラン

(二〇〇二・一〇・二五)